令和５年５月２４日

学校名　鈴鹿市立旭が丘小学校

学校長名　楠田　謙治

令和５年度 校内研究実施計画書

１　研究主題及び教科

研究主題	言葉を正しく理解し，適切に表現する子の育成 ～　土台となる知識と思考力・判断力・表現力等を養って　～
教科・領域	国語科　全領域

２　主題設定の理由

令和４年度に自尊感情において，全国学力・学習状況調査の質問紙で「自分には良いところがある。」という項目でアンケートを行った。結果は 71.9%で，学校目標値である 80%を下回った。そして,「思ったことや考えたことを発表している。」という項目のアンケートにおいても 64.9%で，学校目標値である 80%を同様に下回った。この結果の原因として，生活科・総合的な学習の時間で自分の生き方を見直すことはできたが，その後にそれらを文章や言葉，行動で表現することができないことが達成感や充実感に繋がっていかないのではと考える。全国学力・学習状況調査の国語の結果においても全国値を 0.6%下回った。児童の解答類型を自校分析した結果,「自分の考えを持つことができない。」「条件に沿って書けない。」「聞き手を意識できていない。」といった課題が見えてきた。また，人権部が行った全体研修会でも，すべての学年において「自分の思いを表現できない。」ことが課題として挙げられた。

このようなことから，旭が丘小学校の児童は自分の思いや考えを持つことや，それらを文章や言葉で相手に伝えることに課題があると考えられる。それらの課題を改善していくため，校内研究の教科を国語科と設定する。学習指導要領に書かれている国語科の教科目標は以下の通りである。明記されている目標からも，表現力に課題のある本校にとって国語科を選ぶことは妥当だと考える。

国語科の目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（１）日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

（２）日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。

（３）言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

３　本校児童の「思いを持つこと・伝え合うこと」への課題

生活面では，自分の気持ちをうまく言葉にできず，相手に伝えることが苦手な児童が多い。また，自分の思いは相手に受け入れてほしいが，相手の思いを受け止めることができない自分本位な姿から起こるトラブルも多い。そして，児童数が多いことからさまざまな友だちと関わることができる反面，高学年になってクラス替えをした時に同じクラスになった友だちの名前が分からないといったこともある。しかし，知らない人だからといって，自ら進んで相手を知ることには消極的で受け身なため，なかなか友だちのことを自分事として考えられない，考えようとしないという面がある。せっかく築いた人間関係も１年間でリセットされてしまう。人間関係が希薄なため周りの人に聞けば解決できる事でも教師に聞きにきたり，些細な友だち同士のトラブルも教師に訴えたりすることが多い。

学習面では，記述することに苦手意識を感じている児童が多くみられる。鈴鹿市教育委員会から配信されている「読む・書くワークシート」「よむ YOMU ワークシート」において，選択問題は喜んで取り組むが，記述問題になるといきなり手が止まってしまう。テストの最後に取り組む自分の思いや考えを書く設問を，空欄のまま提出する。このような児童が多く見られる。また，授業中では，発言の理由や根拠を聞かれたときに言葉に詰まってしまったり，挙手することを諦めてしまったりする児童が多くいる。原因として，以下の３点が考えられる。

４　課題の原因

Ⅰ　語彙が少なく，言葉を正しく理解できなかったり，思いや考えを正しく表現したりできない。

語彙力は読書量と相関性があると仮定する。そのため，旭が丘小学校では読書習慣の改善に力を入れて取り組んできた。１人当たりの年間貸出冊数の推移を見てみると，令和３年度の２１冊から令和４年度は３３．３冊へと増加している。この結果から旭が丘小学校独自の取組は成果を上げていることがわかる。

しかし，本校の児童には問題や物語文の読解や文章表現に課題が残る。算数では，問題を正しく読み取れずに誤った式を立てたり，作文では，「楽しかった」や「良かった」という表現がほとんどで，表現力に幅が見られなかったりする。これらは語彙の少なさが原因であると考える。

Ⅱ　自分の思いを表現することへの意欲の低下。

「思ったことや考えたことを発表している。」という項目の学校アンケートにおいて 64.9%という結果だったことから，表現することへの目的意識を高めていく必要性があるように感じる。教材の枠を出ない言語活動から，「何のために」という必然性を持たせる言語活動へと転換するこ

とで，子どもたちの「書きたい」や「伝えたい」,「話したい」といった学びに向かう力を養うことが必要だと考える。

Ⅲ　他者の思いや考えに触れる場面が少なく，自分の思いや考えが広がっていかない。

国語科では，物語文や説明文の単元がいくつか設定されている。その単元の最後には「まとめよう」「ひろげよう」という活動が設定されている。「まとめよう」は考えの形成を意味しており，文章から読み取ったことをもとに自分の思いや考えを作り上げる活動を行う。教科書にはそのときに気を付けるべき視点や条件などが明記してある。そして，「ひろげよう」では，形成した考えを共有することで，自分の考えを広げる活動を行う。

この一連の活動を経て適切な表現力が身につくのではないかと考える。共有することは全体発表や班活動，ペアワークなどを取り入れることで一人ひとりの思いを伝え合うことができる。しかし，本校は児童数８５０名余，学級数３６の大規模校である。学級ごとの児童数も多く，その中でひとり一人の思いや考えを持ち・伝え合う時間を確保することが難しく，新たな言語活動の工夫を考えていきたい。そして，自分の考えを広げる活動も容易ではない。自分と他者の考えを比較し，お互いの考えの良さに気づき，もう一度自分の考えに生かしていくことを実現するための指導方法を探究していきたい。

５　研究の視点

Ⅰ　語彙を豊かにするための系統性を意識した指導の実践

学習指導要領において語彙を豊かにすることについて，語句の量を増やすことと，語句のまとまりや関係，構成や変化について理解することの２つの内容で構成されている。また，以下の表のようにその中でも学年ごとに系統立てて分けられている。「言葉を正しく理解し，適切に表現する子」を目指すためには，各学年での語彙の定着が求められる。語彙が定着するための指導の実践を研究の視点としていく。

	低学年	中学年	高学年
語句の量を増やす	身近なことを表す語句	様子や行動，気持ちや性格を表す語句	思考に関わる語句
語句のまとまりや関係，構成や変化について理解する	意味による語句のまとまりがあることに気付く	性質や役割による語句のまとまりがあることを理解する	語句の構成や変化について理解する

Ⅱ　表現する必然性を生み出す単元計画の探究

学習指導要領において資質・能力は，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得)」，イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，ウ「どのように社会・世界とも関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の３つの柱に整理されている。「言葉を正しく理解し，適切に表現する子」を目指すためには「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」相互に関連しながら育成される必要がある。そのために，子どもが学びに向かう力を養うことのできる単元計画を設定する。さらに，「話したい」ではなく「話さなければならない」と必然性を子どもに感じさせられるようにしていきたい。

単元計画の視点として，①「学びに向かう力・人間性等」を養うものになっていること。また，②「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を育成するためにふさわしい言語活動が設定されていること。この２つを中心に単元構想をしていくことを研究の視点とする。

Ⅲ　表現する機会の確保及び「ひろげよう」における指導方法の探究

限られた授業時数の中で形成した自分の考えを必ず全員が表現する機会を確保する。そして，表現した考えをもとに改めて自分の考えを見直すことができるような指導方法を見出すことを研究の視点とする。

６　研究の視点ごとの具体的な取組

Ⅰ　語彙を豊かにするための系統性を意識した指導の実践

Ⅰ－①　「言葉のたから箱」の活用

２年生から６年生の国語の教科書（光村図書）の巻末に「言葉のたから箱」が掲載されており，教科書内で登場する考えや気持ちを伝える言葉が１ページにまとめてある。この言葉は各学年で獲得しておきたいものである。そのため，「言葉のたから箱」を活用した指導方法を実践していく。１年生は「言葉のたから箱」が掲載されていないので，２年生の教科書（上）に掲載されている言葉の獲得をねらいとする。

Ⅱ　表現する必然性を生み出す単元計画の探究

Ⅱ－①　考えを形成するための選択場面の設定

国語科では，全ての領域において自分の考えを形成する学習過程を重視し，「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。考えを形成するための手立てとして，自分で選択するということを言語活動に組み込んでいく。自分で選択をすることで，そこに自分なりの理由が生まれ考

えが形成される。より効果的に考えの形成をするために，選択のさせ方や選択させる項目の選定などを実践・検討していく。

Ⅱ－②　学習課題の設定

「やってみたい。」や「考えてみたい。」，「こんなふうに進めよう。」，「どうして～だろう。」といった子どもたちの主体性を引き出すことができる学習課題を設定できたか実践・検討していく。

Ⅱ－③　目的意識が明確な言語活動の設定

児童が主体的に学習に取り組むためには目的意識を持たせることが重要である。目的意識とは，自分の行動をどのような目的で行うのかを明確に自覚できることを指す。「誰に伝えたいのか。」や「何のために書くのか。」といった目的意識が明確な言語活動を設定することで，学習の行き先をイメージすることができる。すると，やるべきことが見えてくる。そのため，目的意識が明確な言語活動の設定ができたか実践・検討していく。

Ⅲ　表現する機会の確保及び「ひろげよう」における指導方法の探究

Ⅲ－①　表現する活動の実践

「適切に表現する子の育成」を図るためには，児童ひとり一人が表現する機会を確保することが必要である。すべての児童が自分の思いや考えを表現できる方法を模索していく。

さらに，思考力・判断力・表現力等の主に「書くこと」を育成するために「読む・書くワークシート」をモジュール学習で実践する。実践することで，児童の書く機会を増やし，書くことへの慣れや，書き方の型を学ぶことにつながると考える。また，量の向上として書く機会を増やすことをねらいとするだけではなく，質の向上として設問を見直すこともねらいとする。日々の授業やみえ・スタディ・チェック，全国学力・学習状況調査などを通して，研究主題に対しての児童の課題を明確に捉える。それらの課題に対応した設問づくりに取り組み，実践・検討していく。

Ⅲ－②　「共有」するための指導方法

学習指導要領では，「共有」について各領域で以下のようにまとめられている。

	１・２年	３・４年	５・６年
話すこと	伝えたい事柄や相手に応じて，声の大きさや速さなどを工夫すること。	話の中心や話す場面を意識して，言葉の抑揚や強弱，間の取り方などを工夫すること。	資料を活用するなどして，自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。

聞くこと	話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き，話の内容を捉えて感想をもつこと。	必要なことを記録したり質問したりしながら聞き，話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え，自分の考えをもつこと。	話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて，話の内容を捉え，話し手の考えと比較しながら，自分の考えをまとめること。
話し合うこと	互いの話に関心をもち，相手の発言を受けて話をつなぐこと。	目的や進め方を確認し，司会などの役割を果たしながら話し合い，互いの意見の共通点や相違点に着目し，考えをまとめること。	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い，考えを広げたりまとめたりすること。
書くこと	文章に対する感想を伝え合い，自分の文章の内容や表現のよいところを見付けること。	書こうとしたことが明確になっているかなど，文章に対する感想や意見を伝え合い，自分の文章のよいところを見付けること。	文章全体の構成や展開が明確になっているかなど，文章に対する感想や意見を伝え合い，自分の文章のよいところを見付けること。
読むこと	文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。	文章を読んで感じたことや考えたことを共有し，一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。	文章を読んでまとめた意見や感想を共有し，自分の考えを広げること。

各学年において指導目標を達成するための指導方法を実践・検討していく。

7　研究主題に迫るための四部それぞれの取組

Ⅰ　研修部

- **Ⅰ－①　学習規律の徹底【がんばっＩ０】**
- **Ⅰ－②　読書習慣のより一層の定着【図書】**
- **Ⅰ－③　学びのツール（ICT 機器・思考ツール）の活用**
- **Ⅰ－④　基礎学力の定着【家庭学習】【みえスタ・学調を活用した弱みの分析】【アンケート】**
- **Ⅰ－⑤　校内研修会の実施【研究授業の実施（全体３回・学年３回)】**
- **Ⅰ－⑥　校内環境整備【学年掲示板の活用】【階段掲示物】【教室掲示物】**
- **Ⅰ－⑦　研修部内での実践交流会**
- **Ⅰ－⑧　指導教諭による授業力向上研修会**

Ⅱ　生活安全部

- **Ⅱ－①　児童会や委員会からのお知らせや・活動内容発表活動**
- **Ⅱ－②　学校のきまりの確認**
- **Ⅱ－③　児童への丁寧な聞き取り**

Ⅲ　人権部 Ⅲ－①　スピーチ　「出会い発見」「いいところ見つけ」 Ⅲ－②　実行委員など，活躍の場の設定 Ⅲ－③　生活科，総合的な学習の時間を通した，自分事として考え行動する機会の設定
Ⅳ　体力向上推進部 Ⅳ－①　運動の日常化　体を動かしたいと思える子どもの育成 Ⅳ－②　自身の心と体の健康に興味をもつことのできる子どもの育成 Ⅳ－③　給食委員会による限定からっぽ賞の実施

８　年間研修計画

一学期	・研究の内容，目的などの共通理解を図る。 ・年間指導計画を活用して見通しを持つ。 ・校内研修会を実施する。 ・みえスタディチェックの自校採点を行い，子どもの実態を把握する。 ・研究授業を実施し，研究のねらいを具体的にイメージする。（５月に実施する。） ・指導教諭による授業力向上研修会を開催する。 ・ICT ミニ研修会を開催する。（ICT 支援員と連携を図る。） ・学年ごとに実践レポートをまとめる。 ・全国学力・学習状況調査の分析を行い，子どもの実態を把握する。（夏季休業中に行う。）
二学期	・年間指導計画を活用して見通しを持つ。 ・研究授業を実施する。（全体で３回と学年で３回実施する。） ・指導教諭による授業力向上研修会を開催する。 ・ICT ミニ研修会を開催する。（ICT 支援員と連携を図る。） ・学年ごとに実践レポートをまとめる。
三学期	・年間指導計画を活用して見通しを持つ。 ・研究紀要を作成する。 ・次年度の校内研究実施計画書を作成する。